

した現在まで再発の徴候を認めていない。後腹膜平滑筋肉腫は比較的まれな疾患であり、診断時大きな腫瘤として発見されることが多く、予後は5生率約20%と不良であるが、周囲臓器を含めて遺残なく摘出することにより予後向上が期待できると考えられる。

### 腹壁放線菌症の1例

(湯河原胃腸病院 外科)

新井俊文・吉田 充・福田俊夫・  
依田勇二・遠藤 健・吉田 裕・  
中村英美・福田 滋

〔症例〕62歳男性。主訴：左側腹部痛。既往歴：糖尿病，C型慢性肝炎，高血圧症。現病歴：1997年7月，左側腹部痛が出現し，手拳大の弾性硬な腫瘤を触知した。検査所見：軽度の炎症所見，糖尿病，軽度肝障害が認められた。US，CTで内部不均一な腫瘤を認めた。経過：経皮的生検で確診が得られず，部分切除を施行した。病理組織所見で，放線菌症と診断し術後，抗生剤の投与で残存腫瘤は消失した。

〔考察〕本症は，*Actinomyces israeli* の感染による慢性化膿性肉芽腫性疾患で，広範な壊死と強い繊維増殖を特徴とする。本来常在菌で病原性を有しないが粘膜病変や外傷時に組織内に侵入し病原性を惹起する。慢性化すると腫瘤を形成し，悪性腫瘍との鑑別が困難な場合が多く，腹部腫瘤をとりあつかう際には常に念頭におかねばならない疾患である。

### Mesh-plug 法による成人鼠径ヘルニア修復術の検討

(西横浜国際総合病院 外科，消化器科)

石塚直樹・小松永二・濱谷弘康・  
西川岳男・小松 壽

成人鼠径ヘルニアに対する mesh-plug 法（メ法）と iliopubic tract repair, McVay 法（従来法）での術後経過を比較した。

〔対象〕1996年4月から'97年12月までに行ったメ法16例，従来法18例の2群で比較した。

〔結果〕平均手術時間，平均術後在院日数に有意差はなかった。疼痛程度で，メ法は従来法に比し軽度で術翌日より歩行可とした。平均術後疼痛日数はメ法の方が短期間であった。術後合併症は，従来法で鼠径部腫脹が1例認められた。メ法，従来法それぞれで再発は認めなかった。

〔まとめ〕メ法は術後疼痛が軽微で早期離床が可能であった。手術手技も容易かつ再発率も低いことから，鼠径ヘルニアの標準術式になりうる方法と考えられ

た。

### 鼠径ヘルニアの治療（従来法と mesh plug 法の比較）

(都立荏原病院 外科)

遠藤昭彦・山本雅一・済陽高穂

今回我々は，鼠径ヘルニアの外科治療として従来施行されてきた術式（従来法）と mesh plug 法について，手術時間，合併症，鎮痛剤使用率，在院日数に関して比較検討した。また，preperitoneal approach（腹膜前腔法）とも比較した。対象は平成8（1996）年度に手術した鼠径ヘルニア70例とした。術式の分布は，mesh plug 法19例，腹膜前腔法12例，従来法37例であった。手術時間の比較では mesh plug 法は44.1分と従来法，腹膜前腔法に比較し短時間であった。合併症では mesh plug 法は10%と他の術式と変わらなかった。鎮痛剤使用率は mesh plug 法は63%と他の術式と比べ低かった。在院日数では，mesh plug 法の術後4日以内の退院率は26%で早期退院が可能だった。

### プラグ法による tension-free ヘルニア修復術の有効性についての検討

(防府消化器病センター)

小泉 哲・三浦 修・戸田博之・  
川野豊一・松崎圭祐・戸田智博・  
南園義一・長崎 進

鼠径ヘルニアの外科治療として，より高い術後 QOL が得られるといわれるプラグ法を従来法と手術時間・術後鎮痛剤使用回数・術後在院日数・社会復帰までの時間・社会復帰後も残る術後愁訴・再発率，および以上を総合した満足度について，入院中の記録・アンケート調査により比較検討した。

術後鎮痛剤使用回数・術後在院日数・社会復帰までの期間はプラグ法が従来法に比べ有意に優れていた。また，手術時間・再発率・総合的な満足度についてはより良好な成績が得られる傾向にあったが，有意な差を認めず今後の追跡調査が必要とは思われた。以上の結果から，プラグ法は従来法と比較して成人鼠径ヘルニアに対する術式として優れていると考えられた。

### 劇症肝炎の分子生物学的研究と治療法の up-date

(東女医大 消化器内科) 長谷川潔

劇症肝炎の治療法は，病態に即した方法を選択する必要がある。我々は，B型肝炎ウイルス（HBV）による劇症肝炎の病態に関する研究を行い，適切な治療法について考察を加えた。まず，末梢血，および肝組織内で細胞障害性 T 細胞が著明に増えていること，劇症

肝炎患者由来の HBV 株がマウスに高い抗体産生を促すこと、また臨床的にも劇症肝炎患者では、早期の抗体出現がみられることから、細胞性、液性、共に免疫が亢進していることがわかった。また、この HBV 株は、高い複製能を有していることもわかり、これらのことから、B 型劇症肝炎では免疫抑制剤や、抗ウイルス剤を積極的に使う必要があると考えられた。

#### 超音波内視鏡の最先端

(東女医大 消化器内視鏡科) 村田洋子

超音波内視鏡は1980年に使用され、1991年に細径プローブが開発され、電子走査型による超音波下穿刺細胞診が行われ、1995年に3D表示が試みられた。最近の

進歩として、細径プローブ、電子走査型 EUS, 3D 表示の診断があり、これらの有用性について報告した。消化管では、細径プローブにより狭窄部のスキャンが可能となり、粘膜筋板が描出され m, sm の鑑別が確実となった。超音波下穿刺細胞診が可能になった。3D 表示により理解しやすい画像となった点がある。胆膵疾患では、細径プローブにより膵管、胆管内への挿入が可能となり、超音波下腫瘍細胞診が行われるようになった。さらに、薬液の注入、ドレナージなどが行われている。今後の課題は、より患者さんにとってらかな検査で、3D などを使用し理解しやすい画像で、各種の治療法に使用されることである。